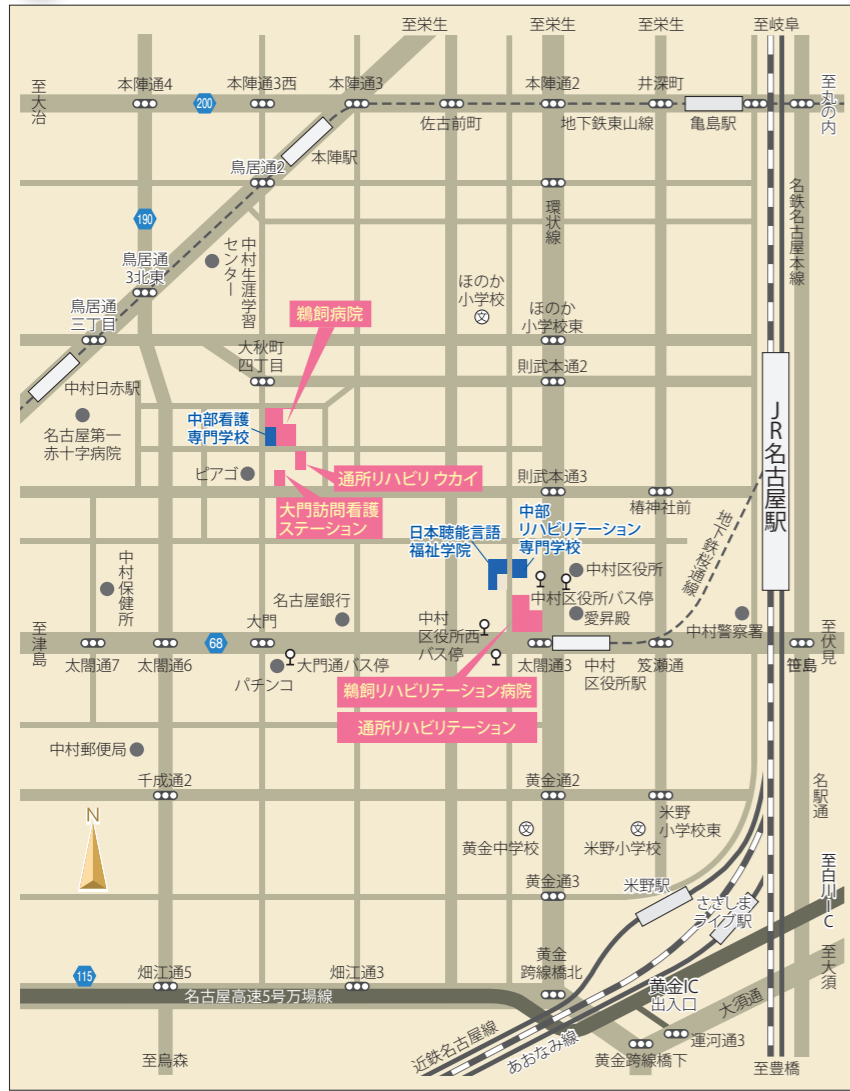


ご案内図



交通アクセスのご案内

- 地下鉄/桜通線「中村区役所」①出口より..... 徒歩約 1分
- 市バス・名鉄バス/「中村区役所」下車..... 徒歩約 1分
- JR名古屋駅太閤通口より..... 車で約 5分
- 名古屋高速道路「黄金」ICより北へ..... 車で約 5分



当院は、  
医療機能評価  
認定病院です。

医療法人 珪山会  
**鵜飼リハビリテーション病院**

〒453-0811 名古屋市中村区太閤通 4-1  
TEL 052-461-3132 FAX 052-461-3231  
Eメール mail@kzan.jp ホームページ <http://www.ukaireha.kzan.jp/>

時代のニーズに応える  
珪山会グループ

**鵜飼 病院**  
TEL 052-461-3131  
FAX 052-461-3136  
名古屋市中村区寿町30

**鵜飼リハビリテーション病院**  
TEL 052-461-3132  
FAX 052-461-3231  
名古屋市中村区太閤通 4-1

**通所リハビリテーション**  
TEL 052-461-3237  
FAX 052-461-3238  
名古屋市中村区太閤通 4-1

**通所リハビリウカイ**  
TEL 052-461-9195  
FAX 052-461-3107  
名古屋市中村区寿町 6-1

**大門訪問看護ステーション**  
TEL 052-471-2533  
FAX 052-485-9702  
名古屋市中村区大門町30

**中部リハビリテーション専門学校**  
TEL 052-461-1677  
FAX 052-471-2333  
名古屋市中村区若宮町 2-2  
<http://www.chureha.kzan.jp/>

**中部看護専門学校**  
TEL 052-461-3133  
FAX 052-483-0873  
名古屋市中村区寿町29  
<http://kango.kzan.jp/>

**日本聴能言語福祉学院**  
TEL 052-482-8788  
FAX 052-471-8703  
名古屋市中村区若宮町 2-14  
<http://ncg.kzan.jp/>

鵜飼リハビリテーション病院  
ハートフル情報誌  
ReHappy!  
Vol.77

鵜飼リハビリテーション病院 ハートフル情報誌

# ReHappy!

リハッピー

Vol.77

発行人/鵜飼泰光  
発行/鵜飼リハビリテーション病院広報委員会  
名古屋市中村区太閤通 4-1  
<http://www.ukaireha.kzan.jp/>  
編集/鵜飼リハビリテーション病院広報委員会  
編集グループ  
編集協力/プロジェクトリンク事務局  
発行/令和3年10月1日

〈特集〉

患者さんの胸の奥にある  
思いを引き出す。



医療法人 珪山会  
**鵜飼リハビリテーション病院**

# 患者さんの胸の奥にある 思いを引き出す。

患者さんの思いを叶えるために奮闘するセラピストたち。  
その活動を追うシリーズ第3弾は、  
言語聴覚士の取り組みをクローズアップ。  
言葉が出にくい、うまく発音できない、意思を伝えられない…。  
もどかしさを抱える患者さんにどのようにアプローチし、  
胸の奥にある思いを引き出すか…、  
ある患者さんと言語聴覚士の物語を追った。



3階病棟 言語聴覚士 服部恵理子

## 2度目の脳梗塞を 発症して。

今から約1年ほど前、鶴岡リハビリテーション病院の3階病棟に、90代の男性（Kさん）が入院してきた。Kさんは以前に一度、脳梗塞の後遺症を治療するため同院に入院したことがある。それから数年経ち、病気が再発。急性期病院での治療を経て、再び同院でリハビリテーションを受けることになったのだ。

入院時のKさんには、幸い、麻痺のような運動機能の障害はほとんどなく、歩くことはもちろん、身の回りのこ

とも年齢相応に自分ですることができた。その一方で、脳の言語をつかさどる部分が損傷され、重い言語障害（失語症）を抱えていた。Kさんを担当した言語聴覚士の服部恵理子は「前回の入院時、Kさんは簡単な会話ではできていました。でも今回入院してこれたときは、表情もぼんやりしており、意味のある言葉は全く出てこないという状態だったんです」と、振り返る。

Kさんの状態を確認した服部は〈失った機能を回復させること〉以上に〈残された機能を使ってコミュニケーションできるようにすること〉に軸を置き、リハビリテーション計画を立てた。その意図について服部はこう話す。「障害の重さや年齢の面から、会話ができるレベルまで機能を回復することは難しい状況でした。しかし、退院後の生活復帰や社会参加を考えると、何とかコミュニケーションを取れるようにはしてあげたい。Kさんは判断力もあり、イエス・ノーの意思表示もできたので、それらを使って周囲の人とコミュニケーションできる仕組み作りに力を入れました」。

服部はまず、意思疎通を助けるツールとして〈コミュニケーションノート〉を用意した。これは、体調はいいか、食欲はあるか、睡眠は取れているかなど、健康状態や身の回りのことが言葉とイラストで描かれているもの。このノートを



開き、自分で「これ」と指を差し、相手に伝えられるように練習した。

次に用意したのは〈会話ノート〉だ。毎日のリハビリテーションで交わした話の内容を、絵とともに記録。それを毎回見返し、以前の会話を踏まえて、コミュニケーションの内容を深めていった。もちろん会話といっても、Kさんの発語はほとんどない。服部の質問にイエス・ノーの意思を示しながら、会話のストーリーを作っていくような感じだった。服部は、この2種類のノートを、病棟の看護師や理学療法士、作業療法士にも見てもらい、スタッフの誰でもノートを活用しながら、Kさんとの意思疎通が図れるよう環境を整えた。

## 「本当は自宅じゃなくて、 施設に入りたい」という希望。

リハビリテーションが始まって約1カ月、Kさんと服部の間に少しずつ信頼関係が芽生えていった。服部は2種類のノートを活用しながらKさんとコミュニケーションを重ね、Kさんから何か要望があれば、その要望を病棟看護師に細かく伝えていった。「ほんの小さなことでも、Kさんの思いが伝わるようにすると、すごく喜んでくれました。きっと自分の気持ちが伝わらないもどかしさを感じておられたんだと思います」と服部。



ある日のリハビリテーションで、服部はKさんの退院後の生活を話題に取り上げた。Kさんは、入院前、長く1人暮らしを続けており、近所に住むお子さんが時折、実家を訪ね、見守るという生活を送っていた。今回病気にはなったものの、身の回りのことができなくなったわけではない。当然、退院後は、元の生活に戻ることを希望しているだろう、と家族も服部も予想していた。

「退院したら、おうちでどんな生活がしたいですか」。服部の問いかけに、Kさんは思案顔で口をもごもごさせ、それからコミュニケーションノートを開いて、何かを探し



ていった。介護施設のイラストを見つけると、「これ」と指差した。「え、自宅ではなく施設？」半信半疑ながら、その理由を二者択一の質問で探っていくと「家族にこれ以上、迷惑をかけたくない」「施設で安心して生活したい」という胸の奥底にしまっていた思いがあふれ出した。服部は、はっとした。自分たちの思い込みで「自宅に帰りたい」と決めつけていたが、そうではなかったのだ。服部はKさんの希望を、他のスタッフや医療ソーシャルワーカーに伝え、介護施設へ入所する方向で退院準備を進めることになった。

同時に、リハビリテーションメニューも一部、見直した。これまではご家族やヘルパーなど、1対1で話すことを想定してきたが、施設に入れば、一度にたくさんの人と関わるようになるからだ。「たとえば、談話室にKさんを連れ出し、そこにいた患者さんも交えて3人で会話するなど、複数でコミュニケーションを取る練習をしました」。重度の言語障害があると、どうしても周囲に心を閉ざしがちになる。そうならないように、服部は心を砕いた。

その後は、施設入所に向けてさまざまなリハビリテーションを継続。いよいよ退院の日が間近となり、退院時カンファレンス(※)が開催された。ここで服部は、コミュニケーションノート、会話ノートを見せながら、Kさんとのコミュニケーション方法について、施設のスタッフたちに細かく丁寧に説明した。退院して施設に入っても、伝えたいことがストレスなく伝えられるようにと願い、服部は退院していくKさんを見送った。

※病院のスタッフ、退院後のケアを担う地域の多職種、患者さんが一堂に会し、情報共有や話し合いを行う会議。

## 患者さんの「伝えたい」を 叶える言語聴覚士の役割。

Kさんのケースを振り返り、患者さんの思いと言語聴覚士の関わりについて、言語聴覚部門主任の小林瑞穂に話を聞いた。「そもそも言語聴覚士が中心になって関わる患者さんは、思うように伝えたいことが伝わらず、苦しい思いをされている方が多いです。そこを私たち言語聴覚士がいかに聞き出すか。患者さんの状態や重症度を正しく評価し、一人ひとりに合った方法で、思いを引き出していくスキルが問われます。Kさんの場合、意思伝



言語聴覚部門 主任 小林瑞穂

達のツールとして、2種類のノートを使うことができましたと思います」。

また、自分たちが患者さんの思いを聞き出すだけでなく、意思疎通の難しい患者さんとのコミュニケーション方法を、他の職種に発信していくのも言語聴覚士の大きな役割だ。「Kさんの事例で活用した2種類のノートのように、『この患者さんにはこんな方法を使うと、会話できますよ』ということをも病棟の看護師や理学療法士、作業療法士に伝え、その後のコミュニケーションがぐっと盛上がります。また、そうした方法だけでなく、お孫さんの話や趣味の話など、その患者さんがどのような話題に興味があるのかを把握して、他の職種に伝えることも私たちの重要な役割です」と、小林は話す。



## 患者さんの思いを聞く スキルを高めていく。

言語聴覚部門では〈患者さんの思いを聞く〉ことを今年度の重点目標に掲げている。その理由について、小林は次のように語る。「私たちは、これまでも患者さんの思いを大切にリハビリテーションを行ってきました。しかし、うまく自分の思いを伝えられない患者さんに対しては、どうしても思い込みで目標を設定してしまうことがあったと思います。患者さんにベストなリハビリテーションを提供するには、スタッフ全員が改めて〈患者さんの思いをリハビリテーションの真ん中に置く〉という意識を持つことが大切だと考えました」。

その言葉を受けて、服部は「Kさんと出会い、思いを聞く大切さを再認識しました。先入観を持たず、まっさらな心で接することが、いいコミュニケーションの第一歩だと思います」と話す。では、患者さんの思いを聞き出すには、どんな工夫が必要だろうか。「何よりも

患者さんの家族、生活、歴史、性格といった背景を十分に理解することですね。ご本人が話せない場合はご家族からも聞き取り、患者さんの思いを推察していくよう努めています」(服部)。さらに服部は、こうした学びを集め、臨床研究としてまとめていきたいという目標を持つ。「今は個々のスタッフが試行錯誤しながら、患者さんの思いを聞いていますが、こんなふうに関わりと効果的だという指針を示せたらいいと考えています。そのために、まずはしっかり事例を蓄積し、分析していきたいと思います」。服部は日々の経験から学びを得て、自己研鑽を続けていこうとしている。

# For the Best Rehabilitation

## Topic 1

### 患者さんの人生観を聞き出し、スタッフで共有する。

本文で述べたように、言語聴覚部門では〈患者さんの思いを聞く〉ことを、今年度の重点目標にしている。その一環として取り組んでいるのが、患者さんの人生観の聞き取りである。入院して間もない時期に、患者さんの重症度に応じて、質問の仕方を変えながら、人生観を聞いていく。たとえば、「人生で一番大事にしている考え方は何ですか」「モットーは何ですか」「これまでの生活で楽しかったことは何ですか」など、角度を変えて質問を投げっていくと、それぞれの心の奥にしまっている思いや価値観が浮かび上がってくるという。

言語聴覚部門では、この聞き取りを定期的に行い、他のセラピストとも情報を共有。〈この患者さんは入院直後とは違い、今はこんな気持ちで過ごしている〉という情報を多職種に伝え、リハビリテーションの目標の見直しなどに役立っている。さらに、聞き取りの最後には必ず、重症

度に配慮しながら、「これからどのように生きていきたいか」という質問も行っている。退院後、患者さんがどのように、その人らしく生きていくか、社会参加していくか、というところまで見通しながら、より良いリハビリテーションを提供するよう心がけている。



## Topic 2

### 患者さんと職員の会話を分析し、会話力向上に役立てる。

言語聴覚士はコミュニケーションを専門にする職種であり、「会話」は重要なスキルの一つだ。しかし、これまで会話の評価はなされておらず、会話の進め方はスタッフ個々の判断に委ねられてきた。そこで、言語聴覚部門では、スタッフの会話力を高めるために、患者さんの認知機能と会話の関係性を調べる研究を実施。2021年6月

の日本言語聴覚学会で発表した。

この研究では、患者さんと病棟スタッフとの間で交わされる会話を対象に、認知機能障害の重症度によって、出てくる話題の違いを調べた。その結果、認知機能障害が重いほど、排泄、睡眠、食欲といった生理的欲求、疲労の訴えなど一時的な感情に関する話題が多くなり、障害が軽いほど、体調や病気・障害、転倒予防など、一日の生活に関わる話題が多くなることがわかった。また、退院後の生活といった先の見通しに関する話題は、重度の認知機能障害がある患者さんとの間ではほとんど交わされないことも明らかになった。

こうしたことから見えてくるのは、重度の認知機能障害がある患者さんに、いきなり今後の生活について尋ねても難し過ぎるし、反対に、認知機能が良好な人に、体調を尋ねてばかりいても会話の発展性が望めないということだ。言語聴覚部門では今後もこうした「会話」に関する研究を続け、コミュニケーション力の向上に役立てていく方針である。



珪山会  
グループからの  
お知らせ

# Support Party!

## 鵜飼病院

地域に密着した病院として、  
患者さん・ご家族を支えます。

当院は、地域に密着した病院として近隣の病院や診療所と連携を取り、患者さんにとってより快適な入院診療・外来診療を提供できるよう努めています。急に体調が悪くなられた方や、救急車の受け入れにも対応しており、整形外科手術も行っています。

また、患者さん、ご家族の「自宅で生活を」という気持ちにお応えできるよう、リハビリテーションにも力を入れています。法人内外の居宅介護支援事業所や訪問看護ステーション等の介護保険サービス事業所と協力し、患者さんのご自宅での生活を支えます。



### 施設概要

リハビリテーションを中心に医療・福祉活動を展開しています。最先端設備と人に優しい環境を整え、患者さん一人ひとりを支えます。

診療科目：内科・神経内科・外科・消化器外科・整形外科・リハビリテーション科・放射線科

病床数：120床（一般病床30、地域包括ケア病床30、療養型病床60）

外来受付時間

月～金曜日 9:00～12:00 / 15:30～18:00

土曜日 9:00～12:00

休診日 日・祝

※在宅医療サービス、介護保険サービスも行っています。

## 通所リハビリ ウカイ

■通所リハビリテーション（1～2時間）・（3～4時間）

病院でのリハビリと  
同等のリハビリの提供に努めています。

介護保険で行う通所リハビリテーション施設（デイケア）です。利用者さんの状態やニーズに合わせ、医師やリハビリ専門スタッフがサービスを提供します。理学療法士・作業療法士・言語聴覚士を配置し、病院でのリハビリ（医療保険）が終了となった場合でも同等のリハビリを提供できるよう努めています。

日常生活での動作獲得やコミュニケーション能力の向上等をめざし、身体機能や筋力の維持・向上がはかれるようプログラムを立案。個別リハビリ、機器での筋力強化やマッサージ、物理療法の低周波やホットパック等を行います。



### 施設概要

体力や基本動作能力の向上をはかりたい方を対象に、20～40分の個別訓練と1～3時間程度の自主訓練を行います。

対象：要介護・要支援認定の方  
ご利用日：月～金曜日  
（祝祭日、年末年始を除く）

ご利用時間：午前 9:00～12:30  
午後 13:30～17:00

サービス内容

○3つのコースと利用者に応じた個別リハビリテーション

○健康状態の確認（メディカルチェック）など

※食事・入浴・送迎はありません。

## 鵜飼リハビリテーション病院

■通所リハビリテーション（1～2時間）

利用者さんの状態に合わせ、  
専門スタッフがリハビリや運動を実施します。



介護保険で行う通所リハビリテーション施設（デイケア）で、1時間30分の短時間型通所リハビリを提供しています。病院を退院した後、安心してご自宅での生活が送れるよう、専門スタッフ（理学療法士）が利用者さんの状態やニーズに合わせ、個別リハビリ（20～40分）や機械を使っでの運動（40～50分）を実施します。

また、平成24年から、要介護者の方に限りお宅を訪問しています。実際の生活現場で情報収集を行うことで、解決が必要な課題を明確にし、より充実したリハビリを提供できるよう、スタッフ一丸となりサポートしています。

### 施設概要

利用者さんの状態に合わせ、20～40分の個別訓練と1時間程度の自主訓練で体力や基本動作能力の維持・向上をはかります。

対象：要介護・要支援認定の方  
ご利用日：月・木・火・金・水・土  
（祝祭日を含む）

ご利用時間：午前 9:00～10:30 / 10:30～12:00  
午後 13:00～14:30 / 14:30～16:00

サービス内容

○筋力増強訓練や関節運動など  
○食事・排泄・更衣・入浴など日常生活動作  
○住宅環境の整備  
○ホームプログラムの指導 など

※食事・入浴・送迎はありません。

## 大門訪問看護ステーション

短期間の利用も可能。  
退院後の不安を取り除きます。

「退院後すぐに体調が悪くならないだろうか」「自宅でどんな運動をすればいいのだろうか」「トイレやお風呂の介助がうまくできるだろうか」など、退院後の不安はどなたもお持ちだと思います。

当ステーションでは、退院前のリハビリ見学等を通して入院スタッフか



らの情報収集を実施しており、退院後、看護師やリハビリスタッフ（理学療法士・作業療法士・言語聴覚士）が週1～2回程度訪問して、ご本人の状態や環境に合わせた指導・援助をしています。退院後から生活が落ち着くまでの短期間利用も可能です。

### 施設概要

看護師、リハビリスタッフがご自宅に訪問し、利用者さんやご家族が安全・安心に暮らせるよう、在宅生活を支援します。

営業日時：月～金曜日 9:00～18:00  
（祝祭日、年末年始を除く）

サービス提供地域：中村区・西区・中川区

サービス内容

○健康状態・病状観察  
○日常生活の支援  
○医療処置・カテーテル管理支援  
○在宅リハビリテーション  
○看護・介護・住宅改修・福祉用具の助言、相談 など

※ご利用にあたっては医師の指示書が必要です。ステーションにお問い合わせいただくか、ケアマネージャーにご相談ください。  
※看護師の24時間対応。